

## JACET 関西支部 2008 年度春季大会

### ワークショップ・研究発表・実践報告・シンポジウム要旨

#### 第1室 ワークショップ 1 10号館6階1062教室

##### 「EU原加盟国の外国語教育政策

##### —ドイツ、フランス、ベルギー、オランダの場合

##### Foreign Language Education Policies of the Original EU Member States: Germany, France, Belgium and the Netherlands

発表者： 林 桂子（広島女学院大学）

杉谷眞佐子（関西大学）

松浦 京子（京都産業大学附属中高等学校）

西尾由利子（京都経済短期大学）

平和を維持し、経済的統合を目的に設立された欧州連合（EU）加盟国は、2008年現在、27か国、23公用語からなっている。多言語・多文化的多様性の中に相互協力と統一を求めて、共通言語である英語および多言語教育について様々な取り組みがなされている。本ワークショップでは、EU原加盟国の中、ドイツ、フランス、ベルギー、オランダの多言語社会における外国語教育政策として多言語教育や言語ポートフォリオ・評価方法に焦点をあて、英語一辺倒の日本の外国語教育政策について、参加者とともに考えたい。各国の発表内容は、現地調査及び文献研究に基づく。

ドイツ—「欧州市民の三言語主義」が提唱されているが教育政策ではどのように展開しているのだろうか？本発表ではドイツにおける外国語運用力の概念の変化、「異文化対応能力」や「言語学習方法の学習」が学習指導要領の中でどのように位置づけられ、また「言語ポートフォリオ」でどのように扱われているかを論じる。

フランス—最も特徴的な動きは、欧州評議会の提案を2005年に法令化したことにある。日常の授業から国家検定試験に至るまで、一体化した変化を求めようとして

いるフランスの試みを考察したい。また仏版「言語ポートフォリオ」について、ストラスブルグの中高等学校での取り組み状況などを交えて紹介したい。

ベルギー—公用語であるオランダ語、フランス語、ドイツ語の各地域の言語共同体のうち、本発表では、オランダ語共同体とフランス語共同体の小学校、中等学校の多言語教育の実態と CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）に基づいて作成された「学習到達目標」を活用した評価方法について論じる。

オランダ—多言語社会における教育制度、初等・中等教育における英語教育の問題点、2言語教育、3言語教育の成功例を紹介する。さらに、EU加盟国としてのオランダが外国語教育を推進し、実施している CEFR およびロッテルダムの教員養成で実施されているポートフォリオについて論じる。

#### 第2室 ワークショップ 2 10号館6階CALL教室4

##### 「私の文学教材実践報告

##### —絵本からシェークスピアまで—

##### Various Ways to Use Literature in a Language

##### Classroom: From a Picture Book to Shakespeare

発表者： 松田 早恵（摂南大学）

齊藤安以子（摂南大学）

玉井 史絵（同志社大学）

藤岡千伊奈（京都外国语大学・非）

論説文やニュースといった「実用的な」教材を重視する傾向にある近年の大学教育の中で、文学は「非実用的」だとして敬遠されてきた。しかし、文学は豊かな言語・知識源であるばかりではなく、人間教育という観点からも無限の可能性を持つ教材となりうる。本ワークショッ

では、絵本、児童文学、シェークスピアなど、あらゆる「言語表現による芸術作品」を「文学」ととらえ、文学教材を用いた授業実践例を報告する。一コマの授業の一部に単発で組み込んだものから一学期という持続的な時間を使って児童文学を読ませたものまで様々であるが、すべての実践例で従来の講読系の授業で行われてきた訳読とは違ったアプローチが取られている。多読とは異なり、一つの作品をクラスのなかに取り入れることで、学生達が読書経験を共有し、学生同士のコミュニケーションが活性化されるように工夫されている。

最初は *Goldilocks and the Three Bears* の例を用い、「絵本を一授業の一部に組み込む」ことができるなどを紹介する。インターネット記事の理解に絵本が重要な役割を果たす例である。次に、「絵本を授業 2~2.5 コマで取り上げる」例として、*Grandfather's Journey* を挙げる。タスクの実例と、学生がストーリーに反応して作り上げた作品もご覧いただく。一方、1 冊の本を 1 学期かけて扱うことも可能である。「必須科目（1 学期間）に児童文学 1 冊を取り入れる」例としては、*Charlie and the Chocolate Factory* を紹介する。ワークシートを工夫して授業を進めることにより成果を上げた例である。次に「選択科目（1 学期間）に児童文学 1 冊を取り入れる」例として *Holes* の授業例を紹介する。CALL 教材（作って教材、スクリーンレッスン等）を駆使して授業に変化をつけた。最後に、「シェークスピアを授業 4 コマで取り上げる」方法では、*Graded Readers* の *Macbeth* をライティングの授業に用い、論理的な構成のパラグラフが書けるよう指導した例を報告する。

以上、これらの例が示すのは、教師の導入の仕方次第で、文学教材は多様な授業をも可能にするということである。

## 第1室 ワークショップ 3 10号館6階 1062教室

### 「EU新加盟国の言語教育政策

#### —エストニア・スロヴェニア・マルタの場合—

#### Language Education Policies of New EU States:

#### Estonia, Slovenia, and Malta

発表者： 橋内 武（桃山学院大学）

脇田 博文（龍谷大学）

米崎 里（帝塚山高等学校）

欧洲連合（EU）は拡大の一途を辿り、2007 年には加盟国が 27 に増大した。EUは、多様性の中に共通の枠組みを求めるという課題をもつ。原加盟国のもっていた理念と方法を継承しながら、言語教育政策にどのような局面を切り拓いていっているのか。ここでは、2004 年に加盟したバルト・中欧・地中海の小国に関する現地調査と文献研究に基づき、多言語社会の言語教育という観点から英語一辺倒の日本の外国語教育政策について再検討する。

バルト 3 国の一つ、エストニア—旧ソ連邦からの独立後 15 年以上経て、2004 年 EU に加盟した。現在他の EU 諸国と同様、多言語教育を目指している。同時に、エストニア語を保護することを目的とした言語法（Keeleseadus）をもつこの国は、ロシア語話者を中心とした非エストニア人へのイマージョン教育を積極的に行っている。ロシア語話者は全体の約 30% である。他のバルト諸国と比べると、その割合は低いものの、ロシア語との兼ね合いを保ちながら、どのように言語教育政策を行っているかを紹介する。

中欧のスロヴェニア—1991 年の旧ユーゲースラビア連邦の崩壊とともに独立して以来、民主化・経済改革を順調に進め、2004 年に EU に加盟した。スロヴェニアは多文化・多言語主義を国家理念として標榜する。言語政策は、EU の一員としてのみならず、多民族国家として幾多の試練を乗り越えてきた歴史的観点からも、重要な意味をもつ。

地中海小国のマルタ—その国語はセム語系のマルタ語であるが、旧宗主国である英語も公用語である。マルタ語と英語を機能別に使い分ける社会（diglossia）であり、二言語教育政策が採られている。小学校からマルタ語も英語も学ぶが、中等教育では教科別にマルタ語か英語が媒介語となる。中学からは第3・第4の言語も学習するが、一番人気はイタリア語、次いでフランス語である。大学ではマルタ語・マルタ文学と外国語を除き、媒介語は英語である。

## 第2室 研究発表 10号館6階1063教室

＜研究発表 1＞「テキスト読解を通じた語の提示法の違いによる語彙習得への影響—高専2年英語学習者を対象に」

**The Effect of Input-Enhancements on Word Acquisition through Text Reading for Second Graders of College Students**

古橋 直己（津山工業高等専門学校）

### 1 目的

テキスト読解による偶発的語彙習得において、目標語をそのまま提示するのではなく、日本語での注釈付き、日本語の意味付き、太字でそれぞれ提示した場合、語彙習得にどのような影響を与えるのかを考察する。

### 2 背景

テキストを読ませることのみによって期待される語彙習得が、10語に1語程度であることは、Tekmen & Daloglu (2006)や Zahar et al (2001)などで指摘されている通りである。この習得割合では、相当な語数を読みこなさなければ、様々な用途に必要な語彙を習得するのは困難である。そこでより習得割合の高い方法として、たとえば目標語の装飾が考えられる。

### 3 仮説

Gが日本語での注釈付き、Rが日本語での意味を提示、Bが太字、Fが頻度を意味するとして、(1)目標語を、4G

(4回ともG)、GR(1回目G、2回目R、あと2回B)、GB(1回目G、あと3回B)、F4(装飾なしで4回提示)で提示したとき、4G、GR、GBのほうが装飾のないF4と比較して語彙習得の割合が向上する。(2)意味に重点を置いた装飾(4G、GR)のほうが視覚に重点を置いた装飾(GB)よりも語彙習得を促進する。

### 4 方法

本研究では、Rott (2007)を基礎として、被験者を第1言語が日本語の高等専門学校2年生とし、英語テキストの目標語を4G、GR、GB、F4で提示し、この提示法の違いが語彙習得にどのように影響を与えるかを調べる。なお、テキストには検定教科書を使用する。

### 5 結論

実験途上そのため、結果の詳細については発表時に示す。

### 6 参考文献

Rott, S. (2007). The Effect of Frequency of Input-Enhancements on Word Learning and Text Comprehension. *Language Learning*, 57(2), 165-199.

Tekmen, E. & Daloglu, A. (2006). An Investigation of Incidental Vocabulary in Relation to Learner Proficiency Level and Word Frequency. *Foreign Language Annals*, 39(2), 220-243.

Zahar, R., Cobb, T., & Spada, N. (2001). Acquiring vocabulary through reading: Effects of frequency and contextual richness. *Canadian Modern Language Review*, 15, 541-572.

＜研究発表 2＞ 「英語発音学習に対する学生の意識と動機付け—どんな英語を、なぜ—」  
**Students' Needs and Motivation for Learning English Pronunciation—What Kind of English, and Why?—**

中西のりこ (神戸学院大学)

英語発音のモデルは、「現代の標準的な発音」を「英語又は米語」のように解釈する「Native Speaker (NS) 型」、対 NS だけでなく母語の異なる話者間での intelligibility を基準にする「EIL (English as an International Language) 型」、言語を話者のアイデンティティと関連づけて捉える「Japalish 型」に大きく分類することができる。これらはそれぞれ理論上説得力のある点と、必ずしも日本の英語教育の実情にそぐわない点を合わせ持っている。本発表では、学生を対象にした意識調査の結果をもとに学習者が実際に「どんな発音をなぜ身につけたいか」を探り、発音を指導する際の動機付けのあり方を考察する。

まず、大半の学生が身につけたいと考えている NS 発音については「かっこいいから」「目標は高い方がよい」という理由の一方で、「NS 発音でないと通じないから」という意見が多く見られた。「間違ってはいけない」という意識が逆に英語を話すことへの抵抗感を強めることが懸念される。次に、EIL 型の発音指導には非 NS を含めた様々な英語変種話者とのインタラクションが不可欠だが、学生が英語・日本語以外の母語話者と英語で会話をする機会は極端に少ないことがわかった。EIL 型モデルを基準に指導する際には、母語が異なる非 NS 間の会話の場面設定をいかに取り入れるかの工夫が必要だ。三つ目の Japalish 型を目標にしている学生は少数で、しかも「自分の母語の特徴を大切にしたい」というよりむしろ「NS 発音は自分には無理だから」という諦めの意見が目立った。Japalish 発音をモデルとする指導者は、このような投げやりな態度を助長しないよう気を配る必要がある。

英語発音に対する意識の傾向には個人差があるため、指導者は学習者が何を求めているかを把握した上でモデルを設定し、効果的な動機付けを促さなければならぬ。

第3室 研究発表・実践報告 10号館6階1064教室  
＜研究発表 3＞ 「日本人小学校英語教員に求められる資質と資質測定方法案」

**Standards for English Teachers in Japanese Elementary Schools and an Outline of Instruments to Measure Teachers' Competence**

松永 舞 (近畿大学)

The latest course of study for elementary school education was put into effect at all Japanese public elementary schools in April 2002. This course of study included items concerning a newly introduced topic entitled, comprehensive studies, which encompassed English activities as part of an international understanding element. According to a 2005 official report on the current situation of English education in public elementary schools, English activities were being conducted at more than 90% of those institutions. Furthermore, homeroom teachers were in charge of teaching English in more than 90% of classes at all grade levels. While English activities have become more prevalent at elementary schools, the level of education in terms of teachers' English abilities and their teaching skills has continued to be rather low. Therefore, in order to more effectively promote a higher quality of English education nationwide, a clear description of the standards elementary English teachers should meet is in great need. Based on numerous previous studies, the presenter of this study will offer suggestions about the

following three aspects of elementary English teacher competence: (a) English language abilities, (b) teaching skills, and (c) knowledge related to teaching methodology. In addition, based on English language proficiency tests and teaching skills tests for English teachers which have been administered in other countries, the presenter will introduce an outline of measuring instruments she plans to create that will evaluate the competence of English teachers in Japanese elementary schools. These instruments will focus on oral English ability and teaching skills. She plans to measure these two aspects of competence through two measuring instruments: a listening test and an individual interview in English. In the interview, each interviewee will be evaluated on his/her oral language proficiency and teaching skills by performing teaching-related activities such as reading a story aloud or giving instruction. In the future, the presenter intends to develop a complete version of the instruments based on the outline and administer them as pilot versions with in-service elementary school English teachers. The presenter hopes that her study and measuring instruments will contribute to teacher development and further improvements in elementary school English education in Japan.

#### ＜研究発表 4＞「学習者と教師に支持された英語授業に関する宿題功課ストラテジーの研究」

#### **The Study on EFL Homework-assigning Strategy with the Support of Learners and Teachers**

**高橋 昌由（大阪府立山田高等学校）**

##### 目的

宿題功課（すなわち、教師が宿題を課す実践）で、どのようなストラテジーが使われているかを探求する。なお、本研究では「宿題功課ストラテジー」を「教師が宿題功課を実践する際の思考過程や行為」ととらえる。

##### 背景

先行研究と経験知にもとづく「宿題功課の 10 原則」(Takahashi, 2007) は、学習者の環境を踏まえ、個を大切にしつつ、授業とその前後の自己学習を連携させ、Homework Policy にもとづいたすぐれた授業実践で、目標に合致したやる気をおこさせるタスクを与え、説明責任を果たしつつ、最適の評価をする、というものである。これを活用する宿題功課においては、宿題功課ストラテジーが資すると考えられる。

##### 質問

宿題を課すのは教師であり、宿題に取り組むのは学習者であるので、宿題功課ストラテジーは教師と学習者の両者から支持されることが必要であると考える。では、そのような宿題功課ストラテジーの具体的項目は何であろうか。

##### 方法

本研究は 3 部で構成される。Study1 では、「英語学習を促進する Facilitative Homework」と筆者が呼ぶ宿題功課の枠組みの 5 つの構成要素の具体例を高校生に自由記述で求めた。Study2 では、Study1 の結果にもとづいて作成した質問項目についての多肢選択方式の質問紙調査で、高校生の支持を調査した。Study3 では、Study2 と同様に高校英語教師の支持を調査した。Study2 と Study3 の両方で支持された項目を本研究で

探求する宿題功課ストラテジーとした。最後に、支持された宿題功課ストラテジーを分類した。

なお、支持された項目の決定は、各項目について、5件法による回答の平均値が3を超えるか、カイ2乗検定により一定の傾向が認められる場合とした。

#### 結論

支持された宿題功課ストラテジー（例：「宿題を定期的に課す」、「事前に予告しておいて課す」）が提示され、分類された。これらの宿題功課ストラテジーが「宿題功課の10原則」とともに活用されることが望まれる。なお、具体的な宿題功課ストラテジーの項目や分析結果は発表の場で示す。

#### 引用文献

Takahashi, M. (2007). Ten Principles in the assignment of English Homework in Japan: A modeling version of Saito's in-class principles. In Kinenronbunshu- Henshuiinkai (Ed.), *Explorations of English Language Instruction*. Tokyo: Sanseido.

### ＜実践報告＞ Alive & Attentive in Large Classes: Keeping All the Students on Track!

#### **BUTTO, Louis (Hyogo Prefectural University)**

Unfortunately, most language classes in Japan contain large numbers of students. Despite this, most of us believe that the instructor is responsible to teach the language to ALL students, or at least have some positive influence on them. In this case, dynamic classroom interaction and discourse can play an important role. Naturally, there is pair-work, and group activities, which are an essential aspect to classroom pedagogy, as well as teacher-led explanations. But there are times when the communication should be between the student and the teacher. However, it is not uncommon that when

the teacher is speaking with one student, the others often tune out. Based on this situation, how can we incorporate all students actively in the large class?

The presenter will offer a pragmatic set of techniques based on the same principle (keeping the students focused with anticipation) that can be used with almost any drill-like situation where listening and speaking in the target language is the goal. By continually walking around the room, employing a point system, the teacher maintains an atmosphere of positive tension. All students are aware that they may be engaged in conversation at any moment. The pace is fast, and they must listen carefully to what is being said. This is not simply a question and answer scenario. Since this demands continuous attention by the students, it can only be used once during a class for about 10-15 minutes, otherwise it can be exhausting. The great benefit of this activity is that although the teacher may be talking one-on-one, still all students are involved. Moreover, if done well, most find the activity quite invigorating.

The presenter, by default, has expanded on these techniques as a result of encountering various obstacles to student involvement. It is hoped that in this way, the audience will be inspired and suggest even more possibilities, so that everyone will gain something new. Furthermore, if time permits, some of the participants in the audience will actually have a chance to try out using these techniques with the rest of us, acting as a class. Please come, and don't miss this opportunity.

## シンポジウム 10号館7階小スタジオ

### Cycling, Skateboarding, and English: All about Them Based upon 101 Questions

「あの二人が語りつくす英語と英語教育」

司会: 加藤 雅之 (神戸大学)

パネリスト: 静 哲人 (関西大学)

青谷 正妥 (京都大学)

本シンポジウムの眼目は、通常の研究発表形式とは異なり、対談・インタビュー形式によってお二人の講師の方に大いに語っていただくこと、また聴衆と一緒に作り上げる双方向のものであることの二点である。いささか特異なタイトルも、袴を脱いで、カジュアルに本音を語っていただこうという思いでつけられた。(お二人がそれぞれサイクリングとスケートボードの名手である(らしい)ことは [http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~shizuka/ および](http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~shizuka/) <http://aotani.net/aotani-KKyoto.html> からも明らかである。)

インタビューの仕掛けとして、私は「101 の質問」を用意することにした。趣味や好きな本から、ご自身の英語修行、授業での工夫、研究の焦点、さらには文科省への異議申し立て、学校での英語教育の問題点、果ては英語観、教育観、人生観にいたるまで大小さまざまな質問が放たれ、あるものは事前に準備した上で、あるものはその場で当意即妙に回答が紡がれていく。意見が分かれるような議題については、即席のミニディベートが生まれ、雌雄が決せられる次第である。「101 の質問」はあらかじめインターネットを通じて収集され、司会によって構成される。聴衆のみなさんにも能動的に参加していただくために、ぜひ刺激的、挑発的な質問を提案していただきたいと考えている。(JACET 関西支部の HP にも掲載しているように、下記のアドレスから質問を投稿していただけます。締切 5月 20 日、日本語での質問も可)

<http://solac.cla.kobe-u.ac.jp/~masakato/cgi-bin/june7th/june7th.html>

静さん、青谷さんはスタイルや研究分野は異なるものの、どちらも現在最も挑発的でスリリングな提言を行っている研究者・教育者である。『英語教育』誌上での大学入試和訳やめぐれ論(静)や TOEIC・TOEFL 満点宣言(青谷)などは耳目を集めたが、そうしたレトリックを可能にしているお二人の学問的核心にも迫ることができればと願っている。

こうした伝統的シンポ形式と異なるフレームワークの中では司会の役割も自ずと公式的規範がずれてくる。もとより私は熟練インタビューではない。髪型もいたって普通、ズボン吊りもつけていないし、紅茶好きでもない。その分、能動的でトリックスター的な聞き手に徹したいと思う。自分の器ではないにしても、少しだけ大胆に、失敗をおそれず、相手におもねることのない触媒になりたいと思う。"All the discussion without fear or favor"を目指したい。

多くの方々の「101 の質問」を通じての事前参加、また、当日参加をお待ちしています。

Dr. Tetsuhito Shizuka

I have been teaching English in Japan for about 25 years now—6 at a junior high, 10 at a senior high, 5 at a kosen, and 10 at a university (you are right; they do not add up because there is some overlap, in case you are wondering). My current weekly teaching schedule comprises one postgraduate and one undergraduate komas for lecturing EFL methodology, six undergraduate “English” classes, and two junior high “sogo English,” the last of which I love the most. As such, I define myself primarily as a classroom teacher (as opposed to a researcher), and the following are some of my beliefs off the top of my head:

The bigger problem with an average Japanese teacher of English is not his/her poor teaching method

but the lack of a good command of the target language that would enable him/her to adopt a much wider range of teaching techniques.

Dr. Masayasu Aotani

I am an English teacher/learner who has not quite figured out where he should stand on the big stage of English teaching/learning in Japan. (This is my weak attempt to translate「日本の英語学習・教育界に於いて、自分の立ち位置をまだ見つけていない。」)

As a former biologist, chemist, and physicist who went into mathematics to perfect the tools of trade, my view of mathematics is strictly, if not exclusively, utilitarian. That is, mathematics exists \*for me\* in order to help me conduct research in other areas of science.

My attitude towards English is quite similar. It is, for me, nothing more than a tool of communication. However, it does not mean I take it lightly. A craftsman is only as good as his/her tools make him/her. Improving this tool called English is of utmost importance, and we should all have a strong sense of urgency and even emergency knowing the average proficiency of today's college graduates in Japan.

## Symposium

### Title: "Cycling, Skateboarding, and English: All about them based upon 101 Questions"

Panelists:

**Dr. Tetsuhito Shizuka (Kansai University)** 静 哲人(関西大学)

Professor, Institute of Foreign Language Education and Research, Kansai University  
BA from Tokyo University of Foreign Studies  
MA (TESOL) from Teachers College, Columbia University (Tokyo Campus, that is)  
PhD (Applied Linguistics) from University of Reading, UK

Publications: 『カタカナでやさしくできるリスニング』(1997 年, 研究社), 『英語授業の大技・小技』(1999 年, 研究社), 『英語テスト作成の達人マニュアル』(2002 年, 大修館), 『English あいうえお これができれば英語は通じる』(2006 年, 文藝春秋), 『基礎から深く理解するラッシュモーデリング: 項目応答理論とは似て非なる測定のパラダイム』(2007 年, 関西大学出版)

**Dr. Masayasu Aotani (Kyoto University)** 青谷正妥(京都大学)

Associate Professor at the International Center of Kyoto University. Born in Osaka City on 04/25/1954. BS in Chemistry (Faculty of Science, Kyoto University). Ph.D. in Mathematics (University of California, Berkeley). Currently working on Ed.D. in TESOL (Temple University, Japan: My area of specialization is Listening in the context of overall proficiency.)

TOEFL CBT 300, TOEFL iBT 120, TOEIC 990, 英語検定 1 級, 通訳技能検定 2 級

Publications: 『英語勉強力』(2005 年, DHC),

『情報社会とコンピュータ』(2005 年, 昭晃堂: 共著), 『超★理系留学術』(2008 年, 化学同人)

Moderator/Catalyst: Masayuki Kato (Kobe University) 加藤

雅之(神戸大学)

Professor, School of Languages and Communication, Kobe University  
BA from Kyoto University (English Literature)  
MA from Tohoku University (English Literature)  
Current field of research: English Education



Cyclist



Skateboarder



Jogger

You might be curious to know about our title for it may look a bit out of place for a traditional JACET symposium, which I am sure all of you will agree has been so successful in conveying to the audience so much useful information, sparkling talks and intellectual satisfaction so far. But it just

came to my mind that a new dimension might be added to the usual format of the symposium by employing a new approach; a spontaneity and a personal touch which can come from the deep expertise and interesting personalities of the panelists. As a one time jogger (alas, no more now), I was tempted to seek someone with the same line of tastes. These accompanying pictures of our panelists, in this way, worked as an inspiration for me to prepare for this session.

As most of you know, Dr. Shizuka and Dr. Aotani are two of the most prominent and established scholars in the field of English education at college in Japan. Although very different in their approaches to the discipline, they have one thing in common (or at least it seems so to me), that is, an irresistible passion to their callings. They are also very vocal in their own ways of expressing what they believe in. Some might remember a bold proposal of Dr. Shizuka's to put an end to Japanese translation problems in university entrance examinations, and others might recall Dr. Aotani's astounding announcement of his TOEIC/TOEFL scores or provocative essays which boldly exposed defective situations of the English education in general in Japan.

To make it more interactive and exciting we have planned to base the panel discussion mainly on 101 questions which will cover small and large issues like the panelists' favorite movies, their early teaching days, their views on early English education in elementary schools, and Monkasho's policy making. Unlike an ordinary symposium format, our discussion will be conducted interactively, dialogically and sometimes provocatively. The discussion will proceed without elaborately scripted scenarios. 101 questions, selected and prepared by the moderator, mainly from those contributed by you, will be expected to generate an interesting chemistry between the speakers. You can be actively involved here by submitting questions for the symposium. Please visit the WEBSITE for details. Be a part of it! Any questions are

welcome either relevant, irrelevant, challenging, or provocative!

(<http://solac.cla.kobe-u.ac.jp/~masakato/cgi-bin/june7th/june7th.html>, Available until May 20)

Although I am officially the moderator, I will be acting rather as a catalyst here. I am not a skilled interviewer myself. I don't have a flamboyant, onion-shaped hair style, nor wear suspenders. My name doesn't make people feel like drinking tea, either. Instead I will hopefully speed up a reaction much faster than it normally occurs in a more formal meeting by working as an active listener. I plan to be a bold catalyst, too. To borrow a well-known motto from the Japan Times, this is going to be "all the discussion without fear or favor".

Masayuki Kato

---

(Messages from the panelists)

#### **Some of My Beliefs**

#### **Tetsuhito Shizuka**

I have been teaching English in Japan for about 25 years now—6 at a junior high, 10 at a senior high, 5 at a *kosen*, and 10 at a university (you are right; they do not add up because there is some overlap, in case you are wondering). My current weekly teaching schedule comprises one postgraduate and one undergraduate komas for lecturing EFL methodology, six undergraduate “English” classes, and two junior high “sogo English,” the last of which I love the most. As such, I define myself primarily as a classroom teacher (as opposed to a researcher), and the following are some of my beliefs off the top of my head:

- The bigger problem with an average Japanese teacher of English is not his/her poor teaching method but the lack of a good command of the target language that would enable him/her to adopt a much wider range of teaching techniques.
- In the first couple of years of learning English,

pronunciation is everything. When they begin teaching English at elementary schools, automatizing articulatory skills should be the top priority.

- I have rarely come across “chants” that seem beneficial. Some are quite unnatural.
- Songs are the best materials for training pronunciation. Having students sing an English song is easy and fun, from junior high kids to postgraduate adults.
- Shadowing, a current fad, is not for most of our students. Why speak rapidly?
- A teacher needs to speak slowly and clearly, not fluently and sloppily, in the classroom.
- Oral reading without efforts to improve the quality of the sounds produced is a waste of time. Reading in a *loud* voice by and of itself is meaningless in a language class. We are not in an *ouen-dan*.
- There is little point in trying to conduct a class entirely in English. What matters is the amount of target language output by the students, not the teacher.
- The best textbook is one in which all the scripts are presented both in Japanese and in English so that precious class time is not wasted in comprehension activities that proceed at a snails’ pace.
- The more tests you give, the better. Actually, the best class is all tests. I am talking about both written and performance tests.
- The evaluation scheme currently imposed to junior and senior high teachers by the MEXT is a mess.
- The concept of World Englishes is irrelevant to our situation. The intelligibility principle is simply a watered-down version of the nativeness principle.
- The holy grail is not in some fancy theory; it is already there in your own classroom.

### Masayasu AOTANI

I am an English teacher/learner who has not quite figured out where he should stand on the big stage of English teaching/learning in Japan. (This is my weak attempt to translate「日本の英語学習・教育界に於いて、自分の立ち位置をまだ見つけていない。」)

As a former biologist, chemist, and physicist who went into mathematics to perfect the tools of trade, my view of

mathematics is strictly, if not exclusively, utilitarian. That is, mathematics exists \*for me\* in order to help me conduct research in other areas of science.

My attitude towards English is quite similar. It is, for me, nothing more than a tool of communication. However, it does not mean I take it lightly. A craftsman is only as good as his/her tools make him/her. Improving this tool called English is of utmost importance, and we should all have a strong sense of urgency and even emergency knowing the average proficiency of today’s college graduates in Japan.

I believe there are two important factors/phases/stages for adults’ English learning; acquisition of knowledge and fluency development. In the simplest, and perhaps too simple to be true, view of language acquisition, the learner goes through these stages for each linguistic “item” he/she should learn and master.

The first phase, acquisition of knowledge, simply means acquiring mostly declarative knowledge of language “items”. The second phase is about developing procedural knowledge that leads to automaticity. Note that TOEFL iBT emphasizes implicit and procedural knowledge more than anything else, and this is justifiably so as native linguistic skills are based on procedural knowledge.

I want to talk about the importance of the above framework.

I also want to talk about the attitudinal problems on the part of the learners, teachers, and researchers.

The leading cause of weak English skills is nothing but laziness. When you were preparing for the entrance examination, you studied day and night and 7 days a week. All you have to do is

to duplicate the same. You do not have to like English at all. I do not like English myself. It is a hallmark of adulthood to be able to do what is necessary and important even if you do not like it. This applies equally to teachers and students.

Opinions are simply opinions. Believing something does not make it right, let alone universally true. We should observe, measure, and/or prove before we can make such a claim. While many in English education emphasize the importance of multicultural awareness and multifaceted approach, they ignore science altogether. All human activities are biological processes. It is of utmost importance to elucidate how the human brain works in order to truly improve our teaching/learning of English. At any rate, I feel there is nothing that is not based on physics and chemistry. (Note: This is only how I feel. This in itself does not make it right or true needless to say.) One should not avoid hard-core scientific approach just because he/she does not like it or is not good at it. This attitudinal problem applies both to teachers and researchers.

Last, but not least. I want to emphasize the importance of understanding your shortcomings and being open and honest about them.

Most of us are nonnative speakers. As such, our English stinks. We make much more mistakes than we care to admit. Know this fact and take it to heart. You are an English teacher with a highly defective English skill. Keep doing your utmost to improve it.

Once you understand how terrible you are, go ahead and share that with your students. Do not hide it. It would be too “harafukururu” as Yoshida Kenko said. Be honest about it, your students will appreciate your honesty and respect you more for that. It will also give you a strong drive and desire to

work extra hard to improve your English. Yes, you are a teacher, but you should also be a learner. This will not change until the end of time. Be a good role model as a learner for your students.

THE most popular materials I give to my students are my essays with visible corrections made by a native speaker and my TOEFL-type speech with accompanying verbatim transcripts which show all the mistakes I have made. They are encouraged by the knowledge that even the teacher makes many mistakes. It also instills in the students a strong sense of urgency since they realize three decades were not sufficient for me.

And, much much more!

See you all there!!